

学校経営のポイント

“わが校”に生かす正・負の事例

若井 彌一

「早いもので」という表現が適切かどうかの吟味はさておき、今年平成16(2004)年も残すところ3週間ほどになった。年度末と同様、年末にこれまでの足跡をふり返ってみる時期である。

この1年を全教職員でふり返る

年初には、この1年を迎えるにあたり、校長、教頭、主任、教諭、養護教諭、事務職員として、人それぞれに抱負を考え、確認したことであろう。抱負を計画化した人もいれば、それほどではなく気持ちを新たににする程度の人もある。私的事項については人それぞれでよい。

しかし、校務(学校教育法第28条第3項)や教育(同条第6項)等のこととなれば、その程度では足りない。抱負は計画化され、それは相当程度まで文章化する必要がある。むろん、それで終わりではなく、文章化された計画(学校経営計画であれ、指導授業計画であれ)を拠りどころとしながらの「実践」がある。

というより、実践を稔り豊かなものとするために計画が立てられるのであり、計画自体がどんなに立派な(充実した)ものであると、実践に結びつかなければ、所詮、夢のプランならぬ机上プランの域を出ないことになる。

そこで、まず“わが校”の学校経営・教育活動について、実践の内容はどうであったかをふり返ってみていただきたい。そして、実践との突き合わせで計画をふり返ってみる。計画が実践に結びついていなかったならば、計画のどこが見通しとして読みが足りなかったのかを検討してみる。

対外的な説明責任(accountability)を負う時代

に入っ、て、どこの学校でも、学校経営であれ、授業活動であれ、その計画はある程度「理想」的な水準で構想されることになりやすい。そのこと自体、悪いどころか、学校経営や授業活動の内容充実・質的向上という観点からは意義のあることなのだが、計画の多くが実践できないでいるとすれば、いわば「戦力分析」と「児童・生徒分析」に欠けるところがあったのであり、そのような計画は、継続しても今後とも大きな効果(成果)は期待できない。

“生かせる事例”を多数の情報源から

“戦力分析”というと少々生々しい表現になるが、教育組織体としての各学校は複数の教職員で構成されたプロジェクトチームのようなものであるから、やはり冷静な戦力分析は欠かせない。とくに、管理職の場合には、所属教職員の総合的な戦力分析に欠けるところがあってはならない。

各学校のプロジェクトチームとしての総合力を向上させていくには、教職員が単に個々を内省するようなやり方でのふり返りをしてみても、効果薄であろう。幸いなことに、教育雑誌、新聞(切抜き版)、一般雑誌、さらにはインターネット上のホームページ等、情報は豊かに広がっている。

“プラスの事例”として生かせるもの、“マイナスの事例”として生かせるもの、という観点から、各学校で教職員が情報を持ち寄って共通の話題とすることも有益かと思われる。広い話題は、会議や研修を楽しくしてくれる。各教職員の情報アンテナの張り方を知って学びあうことも可能である。明るくふり返って、来年に生かしたい。ぜひ、試みを。

(わかい・やいち=上越教育大学教授)

『教職研修資料』メール配信のお知らせ!

『教職研修資料』のご愛読、ありがとうございます。

さて、本紙は、過去4年の間、学校経営版(学校あて)・教育行政版(教育委員会あて)を月に各2回、FAXにより配信してまいりましたが、個人あてに配信してほしい、学校経営版も教育行政版も両方読みたい、など、読者諸先生からの強い要望もあり、05年1月から、配信方法を次のように変更してご要望にお応えすることにいたしました。

学校経営版・教育行政版の区別をなくし、月4回配信する。配信は、pdfファイル添付のメール配信とする(携帯あては不可)。月4回配信のうち、1回は従来どおりFAXでも配信する(FAXの個人あては不可)。

つきましては、メール配信をご希望される先生は、次のURLにて必要事項をご明記のうえ、あらためてお申し込みくださるようお願いいたします(購読料は無料・個人購読も可) <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp/kenshu>